

令和7年度 比治山大学
現代文化学部・健康栄養学部・短期大学部
学校推薦型選抜

基礎適性検査

受験番号	
氏 名	

解答上の注意

1. この問題冊子は、表紙を含み1ページから11ページまであります。
また、解答用紙は1枚です。試験開始後、すぐに中を確認、印刷
や枚数などに不備と思われる点があれば、手を挙げて監督者に知ら
せなさい。
2. 解答は、すべて、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。
3. 問題冊子、解答用紙を持ち出してはいけません。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む）

畳の寸法は縦六尺、横三尺が中京間^{（注1）}の基本であり、京間はそれより五パーセント大きく、江戸間は三パーセント小さい。（a）、こうした寸法は、あくまで基準でしかなくて、日本間に敷き詰められた畳のすべてが同じ寸法で管理されているのではない。（b）一度畳上げをしてから戻す場所をまちがえると、隅と隅が合わずに空間の形を成さなくなってしまうのだ。

これはどういうことかというところ、入り口から奥まったところに位置する上座の畳は、遠近法によって小さく見えるから、基準より一寸大きくつくり、逆に下座は小さく抑え、部屋の広さの加減を見ながら、畳の敷かれる位置によって寸法に微妙なズレが加えられているからである。この寸法の加減を塩梅よく設えることによって、下座の敷居から室内をナガめたときに、空間の全体が歪みなく見え、端正な方形の部屋が、からだに馴染む有機的な印象を与えるようになる。^①あたかもそれは、立像の頭部を意図的に大きく造ったミケランジェロの美意識のように、作品を見るものの視点から、造形の秩序を再構成しようとする感覚とよく似ている。

身体を基準に空間をつくるという発想は、ヨーロッパにも古代から存在し、「黄金分割」という崇高な呼び名が与えられている。近代でもル・コルビジェが「モデュロール」という身体尺にもとづく設計手法を提唱した。しかしながら日本の職人は、理想化された寸法の比率にもとづいて空間を構成するだけではなく、規格化されたモジュール^{（注2）}を遵守しつつも、空間の条件に応じて畳や壁面に大小のズレを生じさせる感覚的な妙技^{（しづみ）}に鑄^{（し）}を削ったのである。その微細な身体感覚を広く様式化してきたことは、日本建築の最も重要な遺産のひとつであったと筆者は思う。

見る者や棲む者の視点から、感覚的にとらえられる心地よさの論理は、図面で管理できる技術ではない。それは職人の見習い段階で、叩き込むようにしてからだに覚え込ませるものであり、美を再現する感覚が肌身に染み込んで初めて、制作技術を教える段階へと進むことができる。

人間の身体をはじめ、自然物の造形には から、生活空間の全体が図面で管理された壁面で覆われてしまうと、私たちの身体感覚は硬直して、外界の自然とつながるしなやかな感性が萎縮してしまうのだ。それはどんなに耳触りの良い崇高なコンセプトを掲げてみても、その空間の中に身を置いたときに、空気の密度や流れによって、生

命を活かす空間と萎縮させる空間とを、優れた身体は瞬時に直感するのである。

近代になると西洋化を国是とする変化のなかで、^③フユウ層を中心に椅子座の習慣が導入されはじめる。明治から大正に至る激動のなかで、近代の建築家たちは「床坐と椅子座の起居様式のちがいを、どのように解決すべきか」という問題に多大な労力を費やしてきた。食卓や寛ぎの空間を床坐と椅子座のどちらに定めるのかによって、床面や壁面の素材、窓を開ける位置や大きさ、天井の高さ、照明の当て方など、空間のあらゆる配置が変わってくる。

日本人の住まいの近代化は、はじめ西洋の建築様式をそのまま模倣する形の「洋館」が建てられ、しばらくすると部分的に西洋の要素を取り込む「洋風」という言葉が生まれる。(c)明治の終わり頃には日本と西洋のそれぞれの特徴を融合させた「和洋折衷」という発想が生まれた。大きくことなる生活様式の融合を図った折衷建築は、思想としては素晴らしく革新的ではあったが、作品の出来栄については、建築家個人のサイリヨウ^④に任されていて、大正から昭和初期にかけてはいくつかの名作も生まれたが、その技法が一般的に共有されるような様式へと高められるまでには、あまりにも時間が短かった。

そして一九四五年に終結した大戦で壊滅的な大敗を喫してから、古き伝統への連続性は大きく断たれ、急激な復興と経済成長を遂げると同時に、米国的な生活様式へと日本全体が呑み込まれていくのである。それでも昭和四十年代頃までは、床坐到卓袱台で生活していた家庭がほとんどであったが、「三種の神器」といわれる電化製品(テレビ、冷蔵庫、洗濯機)が普及して間もなく、椅子とテーブル、応接セット、といった耐久消費財が一般家庭にも普及してゆくことになる。このように見てくると、日本の家庭に椅子が普及してから、まだ四、五十年の時間しか経っていないことがわかる。

古代から中世にかけて、日本には度々椅子がもたらされていたが、それらは庶民一般に普及することにはなかった。しかし、近代においては、約一世紀の時間をかけて椅子座の生活様式がほぼ完全に普及した。とくに戦後の高度成長期に進んだ生活の変化はあまりにも急激で、それは経済的には眼を見張るものであったにちがいないが、^B文化的には古来の伝統を断ち切る形で、欧米化へ大転換をはかるための過程であったといえる。

いまでもみてきたように、起居にかかわる文化の様式は、その土地の自然と風土に育まれながら、永いながい時間をかけて醸成されてきたものである。なかでも日本家屋に優れて特徴的なことは、自然由来の形式に守られながら、畳

の目数に代表されるような匙加減の自由があつて、その質的領域に磨きをかけることによって、過去にも未来にもつながるような、新鮮な「間」の感覚を再生産できた点にあると考える。しかしその領域についても、空間の美感を堪能するための「坐」の技法や、目的に応じて適宜に「座」をしつらえる使い手の嗜みに熟練がなければ、日本の空間は本来内に秘めている機能の大半は発揮されることがない。しかし、わたしたちは、残された文化遺産のなかから過ぎ去った時代の生活を知ることができし、物質文化の扱い方や、動作の型として伝承された無形文化の詳細を知ること、文化を再生させる糸口をみつけることができる。

文字情報が言語的な思考の組み立てによつて「我思う自己」を形成するのに対して、坐の技法や物質文化の使用法をはじめとする身体技法の形式は、環境世界との相互的な連関のなかで「生きられた自己」を形成する。そして日本には、過ぎ去った時代の記憶を宿した有形無形の文化遺産が、他国には例がないほど数多く保存されていることを、いま一度思い起こしたい。遠い過去から連続する身体技法の記憶は、遠い未来へと続く生活の方向性を指し示す羅針盤^⑤の役割をはたすと思われるからである。

(矢田部英正『坐の文明論』による。)

注1 中京間……………「京間」「江戸間」とともに、住宅建築で用いられる畳のサイズのこと。

注2 モジュール……………建築のあらゆる部分を一定の大きさの倍数関係で統一するとき、その基準となる単位の大きさ。

注3 国是……………国民が認めた国の基本的な方針。

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 空欄（ a ）（ c ）にあてはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ただし同じ記号は一度しか選んではならない。

ア したがって イ なぜなら ウ そして エ あるいは オ しかし

問三 波線部 A 「空間の条件に応じて畳や壁面に大小のズレを生じさせる感覚的な妙技」とあるが、日本の職人は、部屋が有機的な印象を与えられるように、畳の寸法について具体的にどのようなことをしたのか。文章中の語句を用いて二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

問四 空欄 にあてはまる語句として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幾何学的な直線というものが存在する イ 幾何学的な直線というものが存在しない
ウ しなやかな感性というものが必要である エ しなやかな感性というものが必要でない

問五 波線部 B 「文化的には古来の伝統を断ち切る形で、欧米化へ大転換をはかるための過程であったといえる」とあるが、起居様式について「古来の伝統を断ち切る」とはどういうことか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大戦後に普及した米国的な生活様式によって、古代から中世にもたらされた椅子は姿を消し、近代的な椅子しか見られなくなったということ。
イ 「和洋折衷」の建物においては建築家個人の趣味が強く反映されるため、日本古来の床坐よりも椅子座の方が多くなったということ。
ウ 日本人が好む床坐を近代の建築においても実現する試みがなされたが、広く受け入れられる様式にまで完成されることはなかったということ。
エ 大戦後、椅子やテーブルなどの耐久消費財が急激に普及したことで、日本人の生活に古来から組み込まれてきた床坐の伝統が失われたということ。

問六 波線部C「起居にかかわる文化の様式」とあるが、日本家屋において特徴的なことについて筆者はどのように述べているか。(1)特徴的な点と、(2)弱みと考えられる点を、文章中の語句を用いてそれぞれ四十字以上五十字以内に説明しなさい。

問七 波線部D「日本には、過ぎ去った時代の記憶を宿した有形無形の文化遺産が、他国には例がないほど数多く保存されていることを、いま一度思い起こしたい」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 起居にかかわる文化の様式はその土地の風土から生まれたもので、日本は欧米化された文化を捨て、日本固有の気候に合った伝統的な生活様式を文化遺産の研究から復活させるべきだと考えているから。

イ 日本には他国には例がないほど数多くの文化遺産が残されており、それらを改めて現代的な視点で見つめ直すことで、伝統的な日本文化を現代に合った形に修正するためのヒントを得られると考えているから。

ウ 日本の自然や風土に育まれてきた身体技法の記憶は日本人の生活に根ざしたものであり、それを宿した文化遺産を知ること、私たちが目指すべき生活の方向性がわかると考えているから。

エ 現在広く見られる言語的な思考による生き方には自ずと限界が存在するが、過去の生活にかかわる知恵を多く含む伝統文化を学び直すことで、その限界を乗り越えることができるはずだと考えているから。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明治以降の近代における西洋化で、建築家たちはそれまでの起居様式と大きくことなる文化を導入するために、床や天井など空間のあらゆる配置を一新することを模索した。

イ 日本で生まれた「和洋折衷」という発想は非常に革新的で優れたものであり、これにもとづいていくつかの名作も生まれたものの、敗戦後の日本には米国的な生活様式が普及していった。

ウ 庶民一般に椅子が普及したのは昭和四十年代以降であり、それまでの床座に卓袱台という日本人らしい生活は失われて、椅子とテーブル、応接セットで生活する家庭がほとんどになった。

エ 身体技法の形式は坐の技法のような物質文化と深く結びついているために、言語的な思考の組み立てを伴う文字情報のような精神文化との結びつきも検討していくことが求められている。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む）

そもそも、どうして人間の社会にはルールが必要なのでしょう。

この点は、古代ギリシャのプラトンやアリストテレスをはじめ、多くの哲学者が考えてきた問題です。アリストテレスは、「人間はポリス^A的動物である」と言いました。ポリスとは、歴史の教科書では「都市国家」と出てきます。今の感覚でいえば、地域の共同体をイメージすればよいでしょう。人間は、他の動物とちがって、そういう共同体のなかでしか生きられないことを、アリストテレスは①ミヌいていました。

（a）動物のなかにも群れを作って生活するものはありますが、動物の群れと人間の社会は根本的にちがいます。ミツバチなどを例外として、動物はみな同じような活動をします。自分で食べ物を集め、巣を作り、子どもを産み育てる、これをすべて一匹がおこないます。

これに対して、人間は、自分一人で身の回りの必要を満たすことができません。食料を生産する人、衣服を作る人、

道具を作る人、燃料を生産する人というように、いろいろな役割に分かれるのが人間の社会の特徴です。人間はそれぞれ異なった役割をもち、互いに依存しあう関係を作ります。人間が豊かな生活をするためには、このような分業と相互依存が不可欠なのです。

(b) たくさんさんの人間が相互に依存しあう社会をつくれば、当然、人間どうしの関係についてルールが必要となります。このようなルールにはさまざまなものがあります。私たちは子どものころから、親や周囲の大人からいろいろなことを教えられてきました。人に迷惑をかけない、嘘をつかない、悪いことをしたら謝るなど、私たちが生きていくうえで必要な常識は、子どものころから学んできたものです。それぞれの人が、だれから指図されなくても、バツソクがあるうとなかろうと、進んでこれらのルールを守るようであれば、人間の社会は円満に維持できるでしょう。

けれども、すべての人が自発的にルールを守って平和な社会を作るなどということは、残念ながら期待できません。人間は、意図して、あるいは偶然に、ルールを破ることがあります。

私が大学生のころ、初めて民法という法律を勉強したとき、な人間の行動を前提としたルールがいろいろと用意されていることにオドロいたことを覚えています。売主が一つの品物を二人に売る約束をした場合、どちらの買主が優先されるかとか、それが土地などの不動産の場合であればどうなるかとか、さまざまな事例への対処の方法を勉強しました。法律を勉強し始めたばかりの学生にとって、人間がそんなに悪いものだとは思えなかったので、とても印象に残っています。

しかし、残念なことに、人間は嘘をついたり裏切ったりする不完全な生き物です。そういう前提で法律はつくられているのです。

(c) 人間はヤジウでも、天使でもありません。人間がたんなる動物であれば、自然の秩序に支配されるだけです。そこには別にルールなど必要ありません。また、人間が天使であれば、すべての行動は正しいものであり、やはりルールなどいらなくなります。

人間の本性は善か悪か、という問題は、大昔の中国で孟子や荀子などの思想家が論じて以来、人間にとっての大テーマです。しかし、善悪のどちらか一方に決め付けられないのが人間の本性です。他人を信じ、協力しあって社会を作っているという意味では、人間には善なる部分があります。しかし、自分勝手に、時として他人を陥れても自分の欲望を

追求したがるという意味では、悪なる部分もあります。

悪なる部分があるからこそ、ルールが必要になるのです。また、善なる部分があるからこそ、人間はルールを守る能力をもっているわけで、ルールを作る意味もあるのです。

~~~~~  
複数の人間が集まって社会を作るときには、かならず政治が生まれます。もつとも親密な家族でさえ、ルールは作られるものです。人間は一人ひとりちがった好みや趣味、考えをもっています。複数の人が一緒に生きていくときには、異なった生き方をする人たちの間で折り合いをつけていかななくてはなりません。

みなさんも、家族のなかで、自分の好みにとったルールを作ろうと、自分の意見を主張して、ほかの家族を説得することがあると思います。たとえば、毎月のお小遣い<sup>こづか</sup>を上げてほしいときに、どうしてお金があるのかを話したり、これからはこういう手伝いをする<sup>こづか</sup>と提案したりするでしょう。これは家族だけのことでありません。会社や学校、地域社会など、さまざまな社会のなかに、そうしたルール作りのための主張と説得は広く存在するのです。これが政治です。

(山口二郎『政治のしくみがわかる本』による。)

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 二重傍線部①・②の文章中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 円満に

ア 調和が取れて穏やかに  
イ 何事にも動じず冷静に  
ウ 困難にも屈せずに  
エ 私欲を捨て厳格に

② 意図して

ア そうなる運命として  
イ 話し合った結果で  
ウ 真面目に取り組んで  
エ ある目的を持って

問三 波線部 A 「人間はポリスの動物である」とあるが、どういうことか。文章中の語句を用いて三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

問四 波線部 B 「動物の群れと人間の社会は根本的にちがいます」とあるが、「動物の群れ」と「人間の社会」のちがいについて説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 動物は群れのなかで同じような活動をするが、人間は共同体のなかで他人と同じような活動はせず、自分の力を頼りにして生きている。

イ 動物は一匹だけでも生きていけるが、人間は孤独に耐えられない生き物なので、だれかにすがるようにして同じような活動をしている。

ウ 動物は自分の身の回りのことを一匹でやりきるが、人間は豊かな生活をするために手分けして働き、相互に依存しあう関係を作っている。

エ 動物は群れを作ることによって役割を分担して生活しているが、人間は一人で生活していくために、いろいろな役割をすべて自分で担っている。

問五 空欄  にあてはまる語句として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

|   |         |   |         |
|---|---------|---|---------|
| ア | 未発達で未成熟 | イ | 不正直で不誠実 |
| ウ | 非効率で非常識 | エ | 無節操で無鉄砲 |

問六 文章中には次の一文が省かれている。この一文が入るべき最も適当な箇所を、空欄（ a ）（ b ）（ c ）の中から一つ選び、記号で答えなさい

人間のこのような不完全さこそが、政治が必要となる理由です。

問七 波線部C「複数の人間が集まって社会を作るときには、かならず政治が生まれます」とあるが、それはなぜか。

文章中の語句を用いて五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア プラトンやアリストテレスは、人間が自発的にルールを守って平和な社会を作らなければならない。

イ 他人を信じ、協力し合うような善の性質と、嘘をつき、裏切るような悪の性質の両面を持ち合わせているのが人間である。

ウ 自分の欲望を追求したが、人間の本性を規制し、社会を維持していくために、法律の勉強はすべての人に必要不可欠といえる。

エ 孟子や荀子は、人間は不完全な生き物であるという前提に立ち、完全な人間になるためにはどうすべきかを考えていた。